



● 国際交流活動の一層の充実を願って

私達は外国を訪れ、来日した外国人と接することを通して、新たな刺激を受け、多様な考え方を知り、多くの情報を得ることができます。教職員にとっても学生にとっても、常に広い世界に目を向け、異文化との交流を進めることはとても大切なことです。

本学は短期大学の時代から国際交流の活動を数多く重ねてきました。平成 4 年にロチェスター工科大学・国立聾工科大学との間で大学間交流協定を結んだのをかわきりにして、8 つの障害者のための高等教育機関との間で姉妹校の関係を作り、毎年秋には国際シンポジウムが開かれています。平成 13 年には聴覚障害者のための国際大学連合 (PEN-International) の創設に参加し、主要な加盟大学として活動してきました。毎年、教職員や学生が世界各地の教育・研究機関を訪問して交流や研修を行い、外国からも多くの教員、研究者や学生が来学して本学の教育実践に対する理解を深めています。

これまでの交流は、どちらかといえば教職員や学生が本学から外国に出かけていき、他国の情報を取り入れることに重点が置かれていました。しかし、本学に蓄積された教育研究の成果には優れたものがたくさんあります。その情報を積極的に提供していくことによって、これからの世界

の障害者高等教育の発展に大きく寄与することができます。今後は本学の情報を国外に積極的に発信し、本学の構成員と海外の教育関係者が共に高め合う形で国際交流の実をあげていくことを考えていきたいと思えます。



アメリカ・国立聾工科大学を訪問した本学学生

特命学長特別補佐 (国際関係) 根本 匡文

● 中国視察研修旅行 教育活動、学生交流を中心に

1. はじめに

2005 年 11 月 30 日 (水) ~ 12 月 4 日 (日)、視覚に障害がある学生が学ぶ鍼灸学専攻では、5 人の教員が学生を引率して、第 1 回中国視察研修を行った。私達が行う鍼灸按摩療法は六世紀に朝鮮半島を経由して中国から伝わったものであることから、鍼灸手技療法の故郷を訪ねるこの研修旅行は、鍼灸学専攻の学生達の大きな関心を集めた。学生の参加は 2 年生 2 名と 3 年生 4 名であったが、残念ながら今回は個々の事情により最終的には同行を断念した数人の学生からの熱い問い合わせもあり、中国研修への意欲が伺えた。

今回の視察研修旅行の目的は、本学同様、視覚障害を持つ学生に高等教育を行っており本学と大学間協定を結んでいる北京連合大学特殊教育学院の視察、学生間交流と、現

地での鍼灸手技療法見学、異文化体験であった。

日程と概要等を表 1 に示す。12 月 2 日は私達の専門性に関係した鍼灸手技療法の見学と施術体験をしたが、それに関する学術面での詳細については別著者がテクノレポートに稿を認める予定であり、本稿では、学生の動き、特に、北京連合大学での学生交流を中心に旅行に参加した学生の感想文を織り込んで報告する。

2. 北京連合大学との交流

(1) 日中大学生のディスカッション

日中大学生がそれぞれの国の手技療法の技術・学術・職域について、また、視覚障害を持ちながら学び、働くことについて語り合い、互いの国の状況を知り、医療人としての思想を深め、今後の両国の、またアジアや世界を視野に

表 1. 視察研修旅行の概要

訪問者	団 長 副団長 教 員 学 生	一幡良利 形井秀一 和久田哲司 佐々木健 殿山希 鍼灸学科3年(加藤俊一 河又弘 佐々木奈央 寺崎直) 2年(中田光一 橋口新司)
日程	11月30日(水) 12月1日(木) 12月2日(金) 12月3日(土) 12月4日(日)	成田 北京 北京連合大学との交流 1.学生交流(ディスカッション、合同授業) 2.日本按摩の紹介 3.施設見学 中国鍼灸手技療法見学・体験 1.北京按摩病院、付属培训学校 2.中国中医研究院鍼灸研究所問診部 3.北京玉手緑盲人保健按摩院 中国文化に触れる:万里の長城、紫禁城、琉璃廠 北京 成田

入れて手技療法を考えようというのが趣旨であった。

当日、北京連合大学の学生 7 人と本学大学生が大応接間に集った。そこで、本学 3 年河又弘君が会の司会進行役を任された。私達教員は傍観者に徹して、両国の学生の議論を見守った。

【中国研修レポート：学生交流会について】

報告 1

河又 弘

昨年 11 月 30 日から 12 月 4 日に中国へ研修に行ってきた。その中で私達は北京連合大学の学生との交流会を行い日本と中国との視覚障害者の生活や身の回りのこと、鍼灸・按摩についてディスカッションを行った。まず、お互いの自己紹介を行い次にそれぞれの国の視覚障害者を取り巻く現状について話をした。その中で、日本では視覚障害者、特に全盲の人でも介助者がいなくても白杖を持ち 1 人で外を歩くことができるが中国では全盲の人が 1 人で外を歩くのは困難であるということが分かった。日本では全盲の人が 1 人でも外を歩けるように点字ブロックが敷かれ道路もほとんどが綺麗に整備されているが、中国ではまだ道路も整備されておらず日本の様に道路に点字ブロックが敷かれているところがないということだった。これは私達も実際に感じたことであった。道路はコンクリートで出来てはいるもののコンクリートが崩れているところがあったり道幅が狭く車とすれ違うのも容易ではなかった。また、街灯も少なく足元も不安定であり視覚障害者が外を歩くのには不安要素がたくさんあった。



ディスカッションに参加した中国の大学生

次に鍼灸・按摩について話をした。元々鍼灸や按摩は中国から伝わったものであり大きな違いはないが、日本では鍼管を用いて鍼施術を行うのが一般的である。しかし、中国では中国鍼と言われる鍼を使い、鍼管を用いずに鍼施術を行うという違いがある。その他にも按摩施術を行う際、中国も大きさの違いはあるが、日本同様、手拭いを用いて行うということが分かった。

今回の交流会では事前の準備が整っていなかったため戸惑う場面も多数あったことが反省点として挙げられるが私達の知らない面を少しでも知ることが出来たことは今後の為にもなることであると思う。尚、今回このような研修に同行して下さった先生方に厚く御礼を申し上げたいと思います。

報告 2

中田 光一

私はこの度の中国研修旅行で印象に残っていることがあります。

一つは、北京連合大学の見学です。学校見学や学生交流会を通じて、あちらの学生の様子や学生と直接会話する事で相手の価値観等を知ることが出来ました。日本での不断の生活の中では、中国の視覚障害者の方の事を知る機会がなかったのでとても有意義な時間を過ごせました。

報告 3

橋口 新司

北京連合大学での学生交流の話し合いでは、日本人と中国人の特性の差がすごくよく出ていました。私たち日本の学生は、自分から発言することはあまり多くなく、誰かの発言中には、静かにしていました。しかし、中国の学生は、他の人が話しているのにもかかわらず、どんどん自分の言いたいことを言っていました。皆が皆そうとは言いつもりありませんが、国民性だと思いました。

そして、通訳が専門の事をおそらくよく理解していない人だと思われる方で、日本の学生と中国の学生との意思疎通が正確にできていないと思いました。同じ事を聞いても返って来る答えはバラバラでした。それは、学生個々の知識の差と、一度に話す人が多いのでどの人の言葉を伝えていいのか通訳の人も迷った結果、よくわからない答えが返って来たのだと思います。通訳は一人しかいないので、せめて一人ずつ話して欲しかったです。

最後に、話し合いが終わりの時間を迎えた時、中国の学生は、すごい早さで退室して行きました。少しびっくりです。悪いとは思いますが、気づけば誰もいなくなっていたのには唖然としました。

(2) 合同授業

北京連合大学で行われていた手技療法実習の授業に私達も参加した。2 年生の基礎実技実習のクラスであったが、学生は按摩を習い始めてまだ半年足らずであり、その日は上肢帯と上肢の基本手技を学んでいた。

まず、中国の学生同士が組んで、先生の指導に従って按摩の練習をしているところを見学した。次に、中国の学生と日本の学生が組になった。まず、中国の学生から按摩施



通訳を介して：合同授業風景

術をしてもらい、その後、日本の学生が施術をした。

私も一人の女学生と組んだ。始めて半年と言うが、なかなか上手い。揉むべき組織にぴたりと手が当たっている。確かな教授法と学生の真摯な態度なくしては、短期間にはならないと驚いた。私も彼女に日本の按摩を試みさせた。彼女は何度も私の手を取って手や指の使い方を確認した。しまいには、通訳を呼んで来て、「どのようにしたら、手指を壊さずに、そのような手技ができるのか」と真剣に質問をして来た。とても意欲的で感激した。そこで、日本で大学生に教えるのと同様に、母指に体重を載せる方法を説明し、やってみせた。

日本の按摩法は起源を遡ると、中国から導引按摩として伝わったものであるが、その後は独自の形に発展を遂げた。欧米で行われている手技療法（オイルマッサージ）では、皮膚に直接行うため、軽擦法（皮膚状を撫で摩る手技）が多く、施術者の体重を載せて揉捏することはあまりないことはよく知られている。しかし、中国でも、母指の使い方は日本のそれとは少し異なるものであることを知った。日本人の好みや生活習慣、価値観から発展し、視覚障害者の手を通して長く伝えられて来た日本按摩の技術を、高い教育と誇りを持って、後世に伝え継いでいくことの重要性を私自身改めて感じた。

【中国研修レポート：合同授業に参加して】

報告 1

中田 光一

実技の時間ではあちらの学生と一人ずつペアになって揉み合いをしました。私は、中国のあん摩と私たちが習っているあん摩では、手の使い方や動かし方が少し違っていると感じました。お互いの国のあん摩を体験・練習し合えた事は思い出に残る経験となりました。

(3) 日本按摩の紹介

本学の佐々木健助教授が大講堂でパワーポイントを用いて講演を行った。題して、『日本按摩の紹介』。

大きな会場は中国の大学生、教員でびっしり埋まった。日本の手技療法に対する興味・関心の高さに驚き、発展しつつある中国の、学問にまで向けられる貪欲さと熱意を肌で感じ、同時に私達に対する歓迎の心と暖かい眼差しを感じた。



日本按摩の紹介

じた。

通訳者は日本文学が専攻であったせいもあるのか、学生交流でのもの足りなさとは打って変わり、日本文化を背景とした佐々木健助教授の講演を生き生きと聴衆に伝え、会場は盛り上がった。私達一行も聴衆に混じって講演を聞いた。

講演の後、本学学生の一人が「日本の按摩について、日本で知らなかったことを改めて知る機会を得た。異国で自国のことを聞くという面白い体験をした。」と私にこやかに語ってくれたのが印象的であった。

3. 施設見学

大学内の施設を見て回った。日本の学生達目を引いたのは、音声で経穴名を示してくれる経穴人形であった。日本でも経穴の描かれた経穴人形はよくある。しかし、ここにあったのは、経穴部位をピンで押すと、その経穴名を言ってくれるものであった。例えば、母指と示指の中手骨底接合部を押すと、「合谷」と、その部にある経穴名を音声で示してくれるというものである。学生達は面白がってあちこち押して感動したが、勿論、音声表示は中国語であった。



音声対応経穴人形を体験

4. 中国の文化に触れる

中国手技療法研修を終えた旅の最終日には、偉大な中国文化に触れようと、観光を企画した。

早朝、ホテルを出て、小一時間バスに揺られると、車窓に山並みが現れた。「万里の長城が見えるよ」と形井教授の声。「右に...」「今度は左...」。説明に合わせて、私は単眼鏡を走らせる。山に城壁が見え隠れする。ぱらぱらと粉雪が舞う...。ああ！感動。こういうことだったのか。ここまで来て、やっと、水墨画に漂う緊張感や、昔覚えた漢詩に流れていた悲しさが理解できるような気になった。清代の町並みがそのまま残る琉璃廠に着いたのは日没。どの店もそろそろ重々しく古めかしい扉を閉めかけていた。静寂さとぴんと張りつめた冷たい空気が忘れ難い。

【中国研修レポート：文化に触れて】

報告 1

加藤 俊一

中国研修旅行最後の 2 日間は観光と買い物をした。まず、最初に万里の長城を目指した。宿泊したホテルからけっこうな距離があり、早朝に出発した。道中は寝てしまい、いつの間にか着いた感じだった。時期的に 12 月ということもあってかなり寒く吹雪いていた。同じ北京でも山を登った分寒くなると覚悟していたが、予想以上に寒く、みんな帽子やマフラーを買った。私自身雪国育ちだから寒さには自信を持っていたが、大陸の寒さはまた違うものがあった。バスを降りたところから、ロープウェイに乗り険しい山をさらに登り、長城に向かった。雪が降っていたこともあってすごい迫力だった。ロープウェイを降りて、階段を一段一段登り始めた。かなり古くに作ったものだけあって一段一段不規則にがっしりしていた。途中で雪が踏み固められていて危険な場所もあったが、せっかくだから頂上を目指した。万里の長城に立って、つくづく中国文化の偉大さには驚かされた。圧倒された。寒かったが行ってよかった。機会があればまた行きたい。

報告 2

橋口 新司

紫禁城では、あまりよくわかりませんでした。全盲に近い私には、ただ寒風吹き荒れる中、歩き、段差を上り下りして、門をくぐっただけに思えます。介助してくれた友人は「部屋がある」とか、「何かある」としか説明をしないので、さらに意味がわかりませんでした。他のメンバーとの歩調もバラバラで私たちは、ちらっと見てすぐに次に進んで行ったこともわからない原因の一つかもしれません。

そのときのガイドの人もなんだか適当で、もう少し説明してもらえたら少しはわかったかもしれません。

最後に迎えるバスが来るまでの時間、買い物できたことはよかったです。

報告 3

中田 光一

市内観光では、北京の繁華街などを散策する事で急激に発展していく北京の町並みや人々の生活感を見ることが出来ました。また、本場の中華料理を食したり、万里の長城や紫禁城等の中国の歴史の一端を自分の目や舌や足で触れることで中国をより身近に感じられるようになりました。

最後に、学生の立場から今回の中国研修を振り返り一番勉強になった事は、中国の視覚障害者の方の様子や現状を垣間見ることが出来た点だと思います。見識を深める上で



万里の長城に立つ

とても勉強になりました。

4. 今後の課題

学生のレポートから、彼らにとって、本視察研修旅行は有意義であり、楽しく、よい経験になったものと推察する。一方、いくつかの課題も示唆された。

第一に、学生交流のためのディスカッションをさせるためには、それ相当の準備が必要であったと考える。互いの置かれている社会的状況を知らず、鍼灸按摩に対する社会的ニーズや免許制度、それらを取り巻く環境も異なる。両国の学生の接点であるはずの専門、鍼灸手技療法の手技も実は同一のものではない。それを予習なしで、いきなり話し合いの席に着いても話題の進展は少ない。互いが自国・相手国の状況をもう少し学習しておくとうよかったと考える。そのためには、日中教員間での打ち合わせや学生の事前学習会が必要であったと考える。少なくとも、両国の教員間でこの会の設定理由や到達目標くらいは明確にしておいた方がよかったですのではないかと考える。

次に、言葉の問題がある。こちらが中国語を、むこうが日本語を習得するというのは理想であるが、短期間では難しいことだろう。ディスカッションは勿論、授業参加でも言葉は必要である。ましてや、双方の学生には視覚障害があり、「見て学ぶ」ということは難しい。言葉を尽くして説明し、実技指導はやってみせて、やらせて指導を繰り返すという本学の実技指導で通常行っている教育手法を中国での交流授業でも行いたい。また、言葉による説明がなされなければ、せっかくの観光もつまらないものと化してしまつたようである。言葉、これが視覚障害者にとって、情報を得るために、新しい知識や技術を得るために、そして楽しむためにも重要なものであることを忘れてはならない。視覚障害者は、言葉の通じない海外に出れば、見えない・聞けない・しゃべれないの三重障害に陥るのである。通訳者の充実は必至であると考えられる。

5. 終わりに：中国と日本は異文化？ Even か？

日本按摩の特徴のひとつは、皮膚に直接行わずに、薄布を介して行うことである。そのために、手さばきの良さや大きさから、日本手拭いを用いる場合が多い。そこで、北京連合大学の学生への土産に日本按摩用の手拭いを用意することにした。日本的な絵柄の手拭いも売ってはいるが、大学名を入れてオリジナルのものを作ることにした。

私には、使いたい柄があった。東洋医学の解剖書にある五臓六腑の絵である。初めて、それを見た時、私はその面白さに胸打たれた。古典を読まずに、絵ばかり見て時間をすごしたことを覚えている。西洋医学では、ダビンチの筋肉のデッサンが有名だが、東洋医学にも解剖学があり、生理学があり、内臓のスケッチがあるのだ。

その図を切り貼りして、どうにか手拭いの下絵ができた時、その解剖書『類経図翼』は明代に書かれた中国の書物であることに気がついた。考えてみれば、当然でもある、日本の東洋医学は中国から伝来したのだから。しかし、その土産を学生達はとても喜んでくれた。

土産といえば、もうひとつ、私は大失敗をしてしまった。北京連合大学に何か土産を用意するようと言われて、デパートをうろついた。陶磁器は英語で China というくらいだから日本から持って行っても面白くない…。そこで私の目をひいたのは、漆塗りの置時計であった。漆器は英語で Japanese というくらいだから、これはよい。大学の片隅に飾ってくれるかしらとこの選択に満足していた。

そんなことから半年経ったつい先日、夜、偶然にかかった教育番組を見て、愕然とした。中国では、「置時計」と

「葬式」は発音が似ているので、置時計は贈り物にはしないと言うのだ！知らなかったとはいえ、あまりの失礼にがっかりした。異文化間の快適なお付き合いのために如何に情報収集や事前学習が大切であるかを私自身痛感した。

最後に、本稿の作成に当たって、旅行に参加した学生、卒業生に寄稿を依頼した。多忙にも拘わらず、快く協力してくださった方々に感謝する。また、数人の原稿は私の編集の都合で内容別に分割して掲載したが、割愛・修正はしていないことを書き添える。



禁を犯した贈り物

保健科学部 保健学科 鍼灸学専攻

殿山 希、佐々木健、和久田哲司、形井秀一、一幅良利

● 日米聾学生の文学的国際交流

本学と米国ナショナル聾工科大学 (National Technical Institute for the Deaf、以下 NTID) は、前身の短期大学時代から姉妹校として交流を深めてきました。両大学間のさまざまな交流活動のうち、俳句・短歌をキーワードとする学生交流は他大学にも類のないユニークなものです。この文学的国際交流は 2001 年以來の継続的活動で、当初から PEN インターナショナル (Postsecondary Education Network International、以下 PEN) の支援を受けています。

始まりは 2001 年春、NTID のクッシュマン氏によって企画された「ロバート・パナラ記念俳句コンテスト」です。パナラ氏は NTID 初の聾者教員として永年教育活動に貢献した人で、詩人としても知られています。そしてパフォーマンス授業に俳句を取り入れる実践を 70 年代から NTID で行っていたのです。この企画は本学との共同事業、第 1 回「日米聾学生俳句コンテスト」として実施されました。

当時の短期大学一般教育科目「文学」(必修)で短歌・俳句が扱われていたこともあり、多くの応募作品が集まりました。入賞した学生は TV 会議を通じてパナラ氏や米国の入賞者と交流し、互いの作品を手話パフォーマンスによって披露しました。この俳句パフォーマンスのビデオ映

像は PEN の HP (<http://www.pen.ntid.rit.edu>) の外、日本財団本部ビルでも流されました。

同年 10 月にはクッシュマン氏が来日し、本学第 2 回日米国際シンポジウムにおいて「聾学生の教育における詩の活用」という題目で講演するとともに、コンテスト入賞者に対するパフォーマンスのワークショップを開きました。

2002 年春にも第 2 回「日米聾学生俳句コンテスト」を企画、実施し、多くの作品が寄せられました。

こうした実績を踏まえて、親善大使の相互訪問を含む「日米聾学生短歌・俳句交流 2005」が企画されました。これは 2005 年 3 月に短期大学学生が NTID を訪問し、5 月に NTID 学生が来学するというプロジェクトです。筑波技術短期大学と NTID は姉妹校として永年の交流実績がありましたが、短期大学側が公式に NTID 学生および同行教職員を受け入れるのはこの時が初めてでした。また、俳句を対象とした前 2 回に対し、この回では日本側は短歌を対象としました。

3 月 6 日から 14 日まで親善大使 5 名が各自の短歌作品を携えて同行教員 3 名・通訳 1 名とともに NTID を訪問しました。



発表を終えたあと、NTID のメンバーとともに



大沼学長と訪日団

親善大使と作品は以下の通りです。

“僕らしさ” 表す古着今日はこれ！胸張り冬の街を歩もう
大谷津和之(電子情報学科情報工学専攻・平成 17 年卒)

小春日和雲にさそわれ部屋を出たかすかな風が優しく触れる
大澤直子(デザイン学科・平成 18 年卒)

英語チャット友のからかい汗にじみ我が指の動き速まるを見る
星野陽子(電子情報学科情報工学専攻・平成 18 年卒)

指先を静かに操り奏でるは音無き世界の音無き調べ
小吉麻伊(電子情報学科電子工学専攻・3 年在学中)

聞こえない同じ立場でいる家族音は無くとも言葉飛び交う
石井孝明(電子情報学科情報工学専攻・3 年在学中)

親善大使の最大の任務はめいめいの短歌作品を手話パフォーマンスで発表することです。発表に先立ち NTID の専門家の指導を受ける機会に恵まれました。さらに、PEN の HP 掲載用にスタジオでのビデオ撮りを経て発表会に臨みました。親善大使は短歌パフォーマンス以外にソーラン節踊りも披露し喝采を浴びました。

友好親善活動以外に、「文学」「ASL 初級」など NTID の授業 5 コマに参加したことも特筆に値します。それまで短期大学の訪米団はたびたび NTID を訪れて授業を「参観」していますが「参加」は初めてのことで、彼らにとっては貴重な体験であり、両校の交流史においては記念すべき一頁となりました。

2 ヶ月後、クッシュマン氏を代表とする訪日団が学生、引率教員、通訳の総勢 10 名で本学を訪問しました。

親善大使 5 名と彼らの作品を紹介しておきましょう。

Stephen McDonald
red sun / on the horizon / reflecting off / knolls of sand / my desire to drink (赤き日は水平線に傾きて夕映えの砂丘水求むる我)

Jack Williams
straddling / the black swan / into the fog / on the river / of my dream (黒鳥の背(せな)にまたがり夢の川水面(みなも)覆う霧のその中へ)

Christopher Zahniel
autumn evening / blowing leaves / gather at the fence (秋の暮れ落ち葉吹き寄す垣のもと)

Sam Sepah
I learn it / before I give it / before I share it / I understand / my love for her (つくづくと思い省み今ぞ知る貴女への愛捧げる時と)

Jessica Thurber
writer's block ... / the yawn that / never came (苦吟してあくび一つ出でもせず)

(試訳：細谷)

滞在中の日程は以下の通りです。

- 5 月 23 日 午後 成田着
- 24 日 午前 学長表敬訪問・学内見学
- 午後 東京の PEN 本部訪問
- 夜 手話狂言鑑賞・東京泊
- 25 日 午前 芭蕉関係史跡訪問
- 午後 交流 (短大学生の発表を中心に)
- 26 日 午前 学内授業等視察
- 午後 視覚部見学・お茶会
- 27 日 終日 村上鬼城資料館訪問
- 28 日 午前 つくば市内散策
- 午後 交流 (NTID 学生の発表を中心に)
- 夜 交流 (さよならパーティー)
- 29 日 午前 筑波山神社を経て成田へ
- 午後 成田発

NTID の訪日団は東京深川を中心とする松尾芭蕉関連の史跡・施設視察、聾の俳人として知られる村上鬼城の群馬県高崎市にある記念館訪問、手話狂言鑑賞など精力的に日



芭蕉が奥の細道の旅に出立した地で芭蕉像とともに



日米両国学生のさよならパーティー



視覚部でマッサージを受ける

程をこなしました。行く先々で俳句を始めとする日本の文化一般に強い関心を寄せ、積極的に学ぼうとする姿勢が印象的でした。キャンパスでも全学的協力を得て、興味深く充実したスケジュールを組むことができました。

「日米聾学生短歌・俳句交流 2005」の成果を活かして、今後も教育的に意義のある国際交流が望まれます。

障害者高等教育研究支援センター
細谷美代子、松藤みどり

● 欧州(フィンランド・スウェーデン・フランス)へのろう・難聴学生との旅

はじめに

ろう学生・難聴の学生を対象にした第1回の国際交流・研修旅行プログラムが始まったのは、今から14年前の1992年(平成4年)3月でした。以後、その実施形態には多少の変更も生じましたが、今年(2006年)3月まで、15年間(15回)継続して国際交流・研修旅行プログラムが実施されてきました。その訪問国は、初めの10年間(10回)が米国であり、その後の5年間(5回)は北欧を中心にした欧州諸国でした。

ここ数年は、本学の学生のみならず、全国の大学で学ぶろう・難聴学生からもこのプログラムに関する問い合わせや参加希望が寄せられます。これには、インターネット上での情報提示によることもあるのですが、この旅行プログラムに参加した学生(卒業生)によるネットワーク効果も大きいようです。

以下では、本年3月に実施したプログラムの概要及び参加した学生の受け止め方などを紹介します。

プログラムの概要

参加者は、本学学生11名、他大学参加21名、本学卒業生(社会人)2名、本学教員3名、元本学教員1名、

手話通訳者3名、そして旅行会社社員の本学卒業生1名がコミュニケーションサポーターとして加わり、総勢42名となりました。例年と違い、今回は他大学からの参加学生が急増したため、40名を超す大旅行団になりました。訪問地(国)は、ヘルシンキ(フィンランド) スtockホルムとエレプロ(スウェーデン) パリ(フランス)です。以下、順を追って報告します。

【ヘルシンキ(フィンランド)にて】



フィンランドの首都、ヘルシンキにあるアルバートろう学校は、ろう児・難聴児のための小中学校で児童数約 60 名余り、バイリンガル（フィンランド手話とフィンランド語）教育を行い、自立心の養成と異文化の尊重を掲げています。

中学生と言っても身体は日本の大学生並みです。体育館を使って双方のプレゼンテーションを行った後、日本から準備していった書道や折り紙に挑戦してもらいました。即席の書道でしたが、皆上手に書いていました。そして、ゲームと一緒に楽しむ様子は、国を超えた友達感覚にあふれていました。

フィンランドは、国の憲法で、ろう者が使う手話をフィンランドの国語（公用語）として認めている国です。ですから、フィンランド手話とフィンランド語（音声）の通訳者（手話通訳者）の養成・派遣事業は重要な国策です。我々は、手話通訳者センターの一つを訪れて丁寧な説明を聞きました。日本からのろう・難聴の学生達は、目を皿のようにしてその話（日本の手話通訳者の手話）を見ていました。ウェブカメラでろう者とのやり取りを行うことは、ごく日常の業務の一コマになっていました。



ヘルシンキにあるフィンランドろうあ連盟本部が入っている建物には、世界ろうあ連盟の事務局本部もあります。世界各国のろう者への援助を積極的に行い、ろう者の言語である手話普及の支援などを行っています。ろう者であれば一度は行って見たいのではないのでしょうか。我々は、ろう者演劇の劇場にもなる国際会議場で、フィンランドろうあ連盟会長によるレクチャーを受けました。仕事が忙しい時にもかかわらず、学生からの質問にも丁寧に答えて頂き、学生達も満足していました。

ろう者が自主的に運営している 110 年以上の歴史を持つデフクラブも訪れました。ろう者の自立的、自主的な活動を支えるクラブです。社会的に自立し、聴者と対等に文化的、社会的な活動を行っているこのようなデフクラブは、北欧では普通に存在しています。国からの補助金も受けていますが、手話通訳業務やろう啞連盟やろう教育などへの活動で経済的活動も行っています。学生達はフィンランドのろう者と出会うことで、社会のあり方の違いを強く感じ取っているようでした。

【ストックホルム（スウェーデン）にて】



ストックホルム大学手話学部には、書記言語を持たない手話言語の表記法（手話記号）を世界に先駆けて独自に考案した教授があり、その指導を受けたろう者の手話言語学博士 2 人が活躍中です。手話言語学博士を有している大学は、他に例はないとのことでした。第 1 番目の博士論文は、原論文として手話言語で提出（手話によるビデオ記録論文を原論文として認定）、それをスウェーデン語に翻訳して出版しています。2 番目の博士論文は、盲ろう者が用いる指点字や触手話が研究テーマになっています。また、聴者を対象にした手話辞書をインターネット上で公開するシステムを構築して、現在では、その語数を大幅に増やしたインターネット手話辞書作成の作業を行っています。日本での盲ろう者の指点字や触手話の方式を説明すると、ろう者の言語学者は非常に強い興味関心を示していました。

スウェーデンの主要な都市にも、フィンランドと同じように、ろう者が集まるデフハウスがあります。その中で一番大きいデフハウスがストックホルムにあります。そして、ろう啞連盟がその運営を支援しています。ストックホルムのデフハウスは、毎日異なるカリキュラムを持っています。主に、昼間は学習・教養講座や様々な行事を行い、毎週木曜の夜はろう者の交流を自由に行うサロンとなります。会議室や売店・喫茶店を持ち、移民のろう者も多いスウェーデンのろうコミュニティを底から支える活動を行っています。手話ができる聴者もここでの行事・活動に自由に参加できるようになっています。日本からの我々の訪問を非常に友好的、家族的雰囲気の中で迎え入れてくれました。

高齢者サービスハウスは、環境も利便性も良いストックホルムの一等地に 1985 年に建てられ、100 以上の高齢者世帯が住んでいます。日本の老人ホームや施設といった例えには、決して似合いません。ろう者の入居は現在 12 名でした。90 歳を過ぎても自立した生活ができるようにサービス体制が整えられています。手話ができる介護職員（介護資格を持つ）もあり、職員にろう者はいません（難聴者はいるとのこと）がコミュニケーションには不自由しない人的環境が整っています。手話が必要などころにはその準

備がなされており、基本的に、ノーマライゼーションの環境が整っています。入居希望者が多いため、現在は増築工事中で、完成後はろう者の高齢者は 19 名まで入居可能となるとのことでした。居住している高齢（100 歳になる）ろう者が我々一行の訪問に興味を示し、挨拶と簡単なコミュニケーションを取ることでもできました。このサービスハウスでの日常が、入居高齢者にとって主体的かつ開放的なものとなっていることは確かなようです。

【エレプロ（スウェーデン）にて】



ストックホルムから特急列車で 1 時間ほどかかるエレプロにあるビルギンスカ高等学校では、ろう・難聴の生徒 100 名程が聴者の生徒と同じ敷地内で学んでいます。お互いに行き来は自由にできます。この高等学校は教職員・生徒の総数が 1,600 名にもなります。カリキュラムには、ホテル・レストランプログラム、子どもとのレクリエーションプログラム、職業訓練（ヘア -、ファッション、デザイン）プログラム、食物プログラム、メディア（情報、広告、印刷）プログラム、健康ケアプログラム、メディア関連に焦点をあてた社会科学プログラムなどがあります。一般科目の中に手話の授業もあって、ろうの歴史についても学んでいます。さらに、手話を学ぶ教室には個室にモニターがあって、それを見ながら学ぶ事もできます。理容室は非常に現代的な雰囲気にあふれていて、日本からの学生達もつい足を踏み入れたくなる程でした。ろう生徒は手話言語、難聴生徒はスウェーデン語を中心に教育をしています。手話が出来ない教師（聴者）も多いので、手話通訳者を配置しています。エレプロにはこの他に 2 つの高等ろう学校（聴者もともに学ぶ）があり、スウェーデンのろう・難聴教育の中心地となっています。

Swedish Institute for Special Needs Education は、日本流に言えば、特殊（特別支援）教育教材研究所ですが、エレプロのそれは、ろう・難聴児教育に必要な教材を研究・開発・作成する国立の専門機関です。ろう教育の質を高め、維持するために必要な教材や教科書を現場に供給することを目的としていますので、現場の教員からの教材（CD や DVD）作りの注文も受け付けます。スウェーデン国内にとどまらず、他の欧州諸国との連携をしながら教材の共同開発・作成も行っています。学生達は、日本にはないろう・

難聴児のための教材を羨ましそうに見入っていました。

【パリ（フランス）にて】



パリろう学校は、筑波大学附属ろう学校と姉妹校を結んでいることもあり、ここを訪れることを楽しみにしていた学生が何人もいました。パリろう学校は世界で最初に設立された手話を使って教育を行ったろう学校と言われており、それを物語るように図書館には歴史的な蔵書を含めて 2 万冊近くが収納されていました。世界のろう教育史上、重要な資料となる書物や文献が所狭しと保管されていました。しかし、現在（近年）の教育に関して言えば、手話を使ってはいませんが（実は、最近まで手話そのものの使用が否定され口話を中心であったと、パリろう学校の卒業生も話していました）、口話でコミュニケーションする生徒も多く、スウェーデンなどの北欧に見られるバイリンガル教育のように手話言語を基本にしたものとはかなり違います（むしろ、日本の状況に似ていると言えます）。手話を使えない先生もかなりいるということでした。また、同窓会組織や卒業生の繋がりは比較的しっかりしていて、卒業して大学や社会で活躍（生活）しているろう者や難聴者のネットワークが出来ているようです。現在の在学学生総数は、中学校合わせて 200 名余り、寮生活生徒は 40 名を数名超える程度とすることでした。日本の学生は、パリろう学校の生徒達の中に手話を使えない生徒が見られたことに驚きながらも、日本と似ているその様子に複雑な表情をしていました。

パリ市内にあるモルピン高等学校は、2 年間の短期大学が付属する私立の高等学校（ろう・難聴・聴生徒が在学）です。ろう者・難聴者がバカロレア（高校卒業試験）を受けることを目標にする唯一の教育機関となっているとの説明がありました。フランスでは、高校卒業試験に受かることが将来の職業を決める重要な資格になっているのです。試験の結果（点数）で、生徒達の進路（将来）が決まると言っても過言ではないでしょう。モルピン高等学校の試験実績は、1990 ~ 2005 年まで、651 名学生在籍のうち、バカロレア国家資格合格者 581 名で、89.2 % の合格率を誇っています。パリろう学校の場合では、このような合格率を出すことは不可能であるとのことでした。授業は基本的に少人数で行われ、教員は手話を使わず口話で行っています。

伝わらない場合には補助的に手話を使用すると言いますが、手話を知らない生徒・教員も多く、情報保障は教員の配慮次第と言えるかもしれません。



訪れた手話研究所では、ろう協会からの講師派遣協力のもとフランス手話の学習・研修が行われていました。フランスで手話を学ぶには、ろう協会か手話研究所が開催する手話教育の研修プログラムを受ける必要があります。国や学校などの主催での手話カリキュラムはありません。教員養成の大学でも手話を学ぶカリキュラムはありません。手話を必要とする(必要と考える)ろう学校の教員やろう児をもつ親は、ろう協会の協力を受けてカリキュラムを作り生徒募集・研修を行っている手話研究所に集まってくるのです。教室で手話を学んでいたパリの生徒達は、飛び入りの私達見学者からの質問に喜んで答えてくれました。日本とフランスの手話の違いを越えて、お互いにコミュニケーションを楽しむ時間をここで持つことが出来ました。

最後に訪問したのが、パリのろう者劇団でした。世界的に有名な劇団で、ろう者世界大会などでも公演を重ねています。国際的に評判になった映画に主演した女優(ろう者)がこの劇団の中心メンバーの一人です。演劇活動だけではなく、フランス国内の手話教育に積極的な活動をしています。聴者の教員や親に手話を教えるだけではなく、口話しか使えないろう者にも手話を教えて、ろう者の生活(活動)範囲を広める支援もしています。劇団へは、プロの役者を目指して多くのろう者が入団しますが、最終的にプロとして活躍できるろう者はわずかです。日本のろう者劇団との繋がりも強く、演劇の交流が行われています。短い時間でしたが、ここでのコミュニケーションは他の訪問先と一味違った豊かさを味わうことが出来ました。

参加学生の反応から

帰国後、それぞれの地元に戻っていった学生の中には、自分の所属する大学や地域で、研修・交流で得られた情報や知見をまとめて報告や発表を行っています。個々に所属する大学などで行った学生もいますが、参加した学生4人が共同して北欧研修旅行報告会(全日本ろう学生懇談会関東支部主催)を開いたりもしました。その案内文には次のように書いてありました。

この報告会では、手話を公用語としている国があるということや、異国のろう教育・文化を少しでも多くの人に聞いてもらい、理解が深まるような内容にしたいと思っています。発表する私たち、そして参加して下さった方々が日本の現状を振り返り、今の自分を見つめ直すきっかけになれば、と思っています。

また、参加した本学(筑波技術短期大学部)学生も自主的に自分のホームページ上に研修旅行のページを作り、公開したり、インターネット上での報告活動を行っています。また、旅行体験が自分にとってどうであったのかということ、文章にして送ってくれた学生もいます。このような研修・交流プログラムの意味(意義)を考えて頂くためにも、参加した学生からの文章の一部をここに紹介します。

【学生の感想】

- ・研修で出会った異国の人と触れ合うとき、周りを見て、「こんなことで引っ込んでどうする? 上手く伝えられなくてもいいから伝えられるところまでやってみよう」と思い切ってやってみた。その結果、相手は快く私の伝えたいことを理解してくれた。私は伝えたいことが伝わった時、心の中がすーっとしたぐらい気持ちよかった。また、相手の優しさに「優しさっていいものだな」と改めて思い、相手の意見を聞く姿勢の必要性を重く思い知らされた。また、研修で一緒になったメンバーのほとんどが年上で一人暮らししているということもあり、社会のマナーというものをよく理解していて、それを教えてくれた。他人への配慮、自分の伝えたい気持ちを理解してもらおう努力や姿勢、相手の意見を聞く姿勢など色々なことを教えてもらった。この研修に参加するか、しないかと悩んで参加した結果、とても有意義なものになった。
- ・ハードな日々で、体力がなかったけど、貴重な経験、自分を成長させて頂いたと思っている。日本の学生と違って、自立心を持ち、自分から進もうとしている北欧の学生たちを見て、情けないと感じた。また、北欧研修旅行で学んだことをもとにして、私たちの力でろう教育を変えたいと思った。しかし、現在の日本は、手話が言語である事を認めてないこともあり、何年かかるかわからないが、必ずろう教育、情報保障なども変える日がやってくるのを信じたい。スタッフさん、参加したメンバーさんと出会ってくれてありがとう。これからも笑顔で頑張っていこう。
- ・私は北欧研修旅行の前まで自分の将来に不安があり、「私は何をしたいのか」が分からないまま大学生活を送ってきた。しかし、旅行を共にした友達や旅行先で知り合った外国人の友達など色々な出会いが私を変えさせてくれ、「これからどうしたいか」という目的が明確になれたので、本当に感謝している。今後、北欧研修旅行で学んだことをもとにして、日本の聾教育に対する疑問を思いきりぶつけていきたいと思う。この旅行は、自分が変わるきっかけにもなれて、今までの人生の中で最高

と言えるくらい一日一日充実した旅行だった。

- ・この旅行は、初海外、10代最後、学生最後(多分)色々な意味で充実した旅行でした。私にとって大きく2つについて学ばされた。まずはコミュニケーション。はじめ、外国人とどうコミュニケーションをとればいいのか不安いっぱいでした。少し知ってた国際手話と身振りを交えて会話をし、通じた時は、何とも言えないぐらい喜びを味わえることができた。また、表情があつてからこそ手話が成り立つんだと改めて思った。コミュニケーションの大切さをこの場で噛みしめることができ、本当に貴重な経験をさせてもらいました。次に、家族が手話を使って話すこと。私の家族は皆口話なのですが、それは限界があり、手話を使ってくれたらどんなに助かるだろうと何度も思ったことがあります。そして、この旅行を通じて、私と同じ思いを持っている子を増やさない、またろう者が住みやすい環境を作りたいとますます膨らんできました。いつかは、ろう者を持つ家族に手話を覚えさせてあげられる場を作りたいと思う。最後に、旅行のメンバーに出会えてよかった。そして、この旅行に参加してよかったと思う。この旅行をサポートしてくださったスタッフの皆さんにお礼を申し上げた

いです。ありがとうございました。皆さん、またいつかお会いできることを楽しみにしています。この旅行がこれからも継続していきますよう祈っています。

おわりに

訪問各国のろう者・難聴者のための学校、高等教育機関、関連団体を訪問する中で、各国の現状や課題の概略をいくらかでも把握することができました。しかし、それ以上に、このプログラムの参加者同士が一緒に過ごした時間の中の体験は、一人一人の参加者の中に記憶に残る知的刺激を与えてくれました。日本から同行した他大学生との間でも、日本での自分たちの問題について語る機会を持ちました。その成果は、帰国後の活動として現れていますし、お互いの交流は帰国後も続いているのです。

しかし、希望者が多くなったことを受けて参加人数を増やしたことが、旅行中、参加者へ過大な負担を与えることにもなりました。希望や期待が大きければ大きいほど、それに応えるための判断と準備が重要になります。その点を大きな反省材料として、今後のプログラムの改善、充実を考えていきたいと思えます。

産業技術学部 産業情報学科 新井 孝昭

● 平成 17 年度第一回理学療法学海外研修報告

はじめに

筑波技術短期大学国際交流委員会では平成 17 年度に初めて理学療法を内容とした研修を米国で行いました。このプロジェクトが企画された背景には、「将来留学するなら米国へ」「リハビリテーション先進国である米国の理学療法を見たい」という学生の声と卒業生の井口正樹君(理学療学科卒 2 期生)がアイオワ大学大学院に留学中ということがあります。

そこで平成 16 年度に黒川哲宇元一般教育教授と共にアイオワ大学を事前訪問し、筑波技術短期大学を紹介する講演を行って相互理解を深め、平成 17 年度に本学理学療学科の学生がアイオワ大学にて短期研修する承諾を得ました。

スペシャルオリンピックスの Global Clinical Advisor を兼任している Donna Baingridge, PT, EdD, ATC からモンタナ大学を訪問して欲しいとのお誘いを受けましたので、急遽モンタナ大学訪問を研修内容に追加する運びとなりました。

研修について

1. 研修期間 平成 17 年 11 月 23 日～12 月 4 日
(秋休假期間)
2. 参加者
参加者 5 名の内訳は、1 年生 本村美咲、森田美子、2 年生 片伯部公次、世戸由紀菜、教員 薄葉真理子でした。

海外渡航経験に関しては、初心者 1 名、観光で行ったことがある 2 名、海外生活経験者 2 名(教員含む)でした。

3. 目的

- 1) アイオワ大学およびモンタナ大学の理学療学科を訪問し、授業に参加する。
- 2) 米国における理学療法の臨床現場を視察する。
- 3) アイオワ大学およびモンタナ大学の教職員および学生と交流する。
- 4) アメリカ留学について概念的に理解する。

4. 出国前までの事前準備

出国前までに医学用語と英会話(主に自己紹介)のセミナーを 4 回行いました。名札は学生が作成しました。

5. 研修内容

5-1 モンタナ大学

- 1) モンタナ大学について
モンタナ州ミズーラ市に 1893 年設立。学生数はおよそ 15,000 人(内大学院生 1,780 人)、教員数およそ 600 人、留学生数およそ 400 人(64ヶ国)の中規模の州立大学です。



モンタナ大学：訓練機器に試乗しながら交流

2) モンタナ大学理学療法士養成課程について

モンタナ大学の理学療法士養成課程は博士課程です(米国の理学療法士養成課程の殆どは博士課程)。このモンタナ大学には医学部や大学付属病院はなく、理学療法士養成課程が単独で School of Physical Therapy and Rehabilitation Science と組織づけられています。学生教育を目的とした学科付属の Nora Staael Evert Physical Therapy Clinic という理学療法診療室(常勤理学療法士3名)と The New Directions Wellness Center という運動機能訓練室が校舎棟内に設置されています。前者では回復を目的とした医療(外来のみ)を理学療法士が行っています。後者では慢性疾患のある低所得者の身体障害者のみを対象に運動機能維持のための訓練を提供する場となっています。数名の学生が交替で患者の世話をしたり、実験補助を行っています。

3) 診療室と訓練室の見学

養成課程主任 Steven Fehrer, PhD, PT 助教授が診療室と訓練室を案内。学生達は患者さんやモンタナ大学の学生に自由に質問し、訓練機器に試乗させてもらいました。特に訓練室では、多くの訓練室利用者が楽しく運動している中で会話が弾んでいるようでした。

4) 授業参加

モンタナ大学では「整形外科理学療法学」と「循環器理学療法と薬学」の授業に参加しました。モンタナ大学の学生に混じって手の関節の検査と関節モビリティの演習を行いました。循環器理学療法学と薬学の講義に参加し、日本では珍しい講義内容を聞きました。



モンタナ大学：手関節治療の実習に参加

5) 昼食会とキャンパスツアー



モンタナ大学：キャンパスツアー

Fehrer 助教授の配慮により、日米の学生達が一緒に昼食会を持ちました。早起きしてご飯とふりかけで小さなおにぎりを沢山作り持参しました。また、雪が時折降る寒い日で

したが、1時間程のキャンパスツアーをモンタナの学生がしてくれました。

6) リハビリテーションセンターと開業医院を見学

ミズーラ市ではモンタナ大学キャンパス外に、「Community Rehabilitation Center」(地域リハビリテーションセンター)と理学療法の開業医院を Baingridge 氏が案内してくれました。リハビリテーションセンターでは日本では数少ないリハビリテーション専門ナースに会い、

明るい雰囲気での訓練室やリハビリ用に整備された病室を見学し、交通事故による骨盤骨折で歩行訓練中の日本人女性を見舞いました。Brent Dodge 氏の「Montana Orthopedic Physical Therapy」整形外科専門理学療法クリニックでは頸椎症の女性患者と人工椎間板術後1ヶ月の男性患者の治療を見学しました。

7) 宿泊



モンタナ：留学生用アパートの居間で医学用語の自主勉強中

ミズーラ市に滞在中は、キャンパス敷地内に建つ留学生用アパートに宿泊し、留学生気分を少し味わいました。夕食後、広い食堂で医学用語の自主勉強を行いました。アパートから徒歩15分の所に小さな商店街があり、朝食に必要なものをスーパーで購入しました。スーパーでは牛乳・肉の塊・野菜等、何でも大きいことに皆驚いていました。

5 - 2 アイオワ大学

1) アイオワ大学について

アイオワ州アイオワシティー市に1847年設立。学生数はおよそ30,000人、教員数およそ1,700人、留学生が7%を占める(109ヶ国)大規模な州立大学です。学部専攻が100、大学院は114分野に亘ります。理学療法課程の正式名称は Graduate Program in Physical Therapy and Rehabilitation Science です。

2) アイオワ大学の理学療法課程について

アイオワ大学には、モンタナ大学と同様博士課程の理学療法士養成課程がありますが、その他にも理学療法法の免許を既に取得した人が更に学ぶ修士課程と博士課程があります。後者の博士課程に卒業生の井口君は在籍中です。



アイオワ大学：大学付属病院にて理学療法部門の見学

3) 教室などの見学と昼食会

課程主任の David Nielsen, PhD, PT 教授が教室、実習室、実験室、理学療法の学生専用ラウンジを案内してくれました。ラウンジと言ってもくつろぐ場所ではなく、PC機器・ソファ・関連書籍が置いてある24時間利用可能な自習室でした。アイオワ大学でも日米学生合同の昼食会が行われました。リラックスした雰囲気の中で、日本からの来客に質問が飛び交いました。

4) Shadowing



アイオワ大学付属病院での shadowing

アイオワ大学では大学付属病院(762床、医師だけで1316名)のリハビリテーション診療部門を訪ね、部門主任の Ken Leo 理学療法士より部門の説明を受けました。診療部門はとても広く、更に物理療法室、循環・呼吸器理学療法室、運動訓練プール室、職業訓練室、歩行訓練室、整形外科理学療法室などに分かれていました。部門の説明の後、学生ひとりひとりが各々理学療法士に付き添って理学療法の治療場面を1~2時間見学させてもらいました。影のように理学療法士について回るので、「Shadowing」と呼ぶそうです。私は2年生の世戸さんが Debra Weiss 理学療法士の shadowing をしているところを見せてもらいました。患者さんに会う前に、患者さんの術前術後のレントゲン写真やこれからどのような治療をしようとしているのか、説明を受けていました。患者さんは股関節全置換術後1日目の女性で、病室では簡単な検査と歩き方の説明の後、理学療法士と一緒に歩行器で病室の外まで歩いて戻ってきました。昨日手術したばかりの人とは思えない、と世戸さんは驚いていました。治療後、スタッフ控え室で Debra より今後の方針について話を聞き、学生も判らなかつたことについて英語で質問をしていました。

5) 授業および勉強会に参加

アイオワ大学でも授業と勉強会に参加しました。運動学の授業内容は歩行運動力学でした。日本で勉強した内容だったので、分かりやすかったと思います。勉強会ではシンシナチ大学 Timothy Hewlett 氏による講演(前十字靭帯損傷の理学療法について)の後、熱心に質疑応答が行われていました。

6) シンポジウムに参加



アイオワ大学：井口君の指導教員シールズ博士と

アイオワ大学訪問期間中にアイオワ大学スポーツ医学センター整形リハビリテーション部主催の第21回 Hawkeye Sport Medicine Symposium が開催されていました。シンポジウム担当の Glenn Williams 助教授の招待で私達も参加し、体操の

セッションを聞いてきました。

7) 開業医院を訪問

アイオワシティー市でも、理学療法の開業医院を訪問しました。David Williams 氏を中心となって5名の理学療法士が勤める、筋力強化とコンディショニングを得意とする

「Performance Therapies, PC」というクリニックでした。腰椎症の女性患者と故障後のパレーダンスの治療を見学しました。Soft Tissue Mobilization という手技は、視覚を用いずに、手の感覚を使って行う治療方法ということで、Dave Reese 理学療法士が学生達に実技講習をしてくれました。

8) 宿泊

アイオワ滞在中は、キャンパス敷地内に建つホテル「アイオワハウスホテル」に宿泊しました。キャンパス内にありますが、一般のホテルと相違はありません。学生会館に隣接し、非常に快適で便利です。井口君と夕食を共にし、留学生活の話まで聞きました。

・成果

其々の訪問先で盛り沢山のスケジュールが組まれていましたが、学生達は精力的にすべてのプログラムに参加することが出来ました。短期間でこれだけの研修をこなすには、引率教員の指導や説明は不可欠でした。しかし、すべてが目新しく異なる文化の中で、プログラムを必死に遂行した学生達は、少しずつ自立心と行動力を養ったと思います。

日本では見ることが出来ない理学療法の開業医院や授業など、見るものすべてが新しく、学生にとって良い刺激になったようです。学生達は現在長期の臨床実習中のため、残念ながら感想を紹介できませんが、この研修が良い刺激になり、理学療法について深く学ぼうとする意欲が湧いたと思います。

短い海外研修でしたが、留学の様子を経験できたと思います。研修前は、将来留学を希望していながら、不安感と自信のなさから留学することを躊躇していた学生が、「何事も自ら求めなければ始まらない」と積極的な気持ちを養ったと思います。研修に参加した学生の一人は、この夏単独でアイルランドにホームステイに行っています。この研修が将来の夢の実現や留学に発展していくことを期待します。

・おわりに

平成18年度は夏季休暇中に研修を企画し、学生3名が参加する予定です。この研修が引き続き行われ、参加希望者全員が行けるように企画していきたいと思います。また、



Soft Tissue Mobilization の実技演習



アイオワの雪と遊ぶ

この研修のことを聞いた卒業生からも参加希望がでてい
ますので、今後は卒業生の参加も視野に入れて、在学生との
合同研修を企画したいと思います。

平成 18 年度より渡航費の一部に対する支援が実現する

ことになりました。財団の支援に心より感謝致します。

保健科学部 保健学科 理学療法学専攻 薄葉眞理子

● スペインの理学療法大学、大学病院視察報告

1. 目的

スペインにおける視覚障害者のための理学療法大学及び
大学病院を視察し国際交流の可能性を検討する。

2. 視察期間：2006 年 2 月 21 日～ 2 月 27 日

3. 参加者：高橋洋（保健科学部保健学科理学療法学専攻）

4. 視察場所：スペイン、マドリード



会議室のような教室。黒板はほとんど使わない

1) 理学療法大学 (Escuela Universitaria de Fisioterapia de la ONCE EUF と略す) マドリードにあり自治大学群の
なかの 1 つで 3 年制大学である。視覚障害を持つ学生の理
学療法教育をしている。

経済的基盤は ONCE (Spanish National Organization of
the Blind。1983 年スペイン全土の数多くの小さな視覚障
害者組織が集まって設立された非営利組織) に依っている。
学生 59 名中全盲学生は 1 割ほどいる。学生数、職員配置
比較は下表のようになっている。

	EUF	筑波技術短期大学部 理学療法学専攻
学生	1 年生 24 名 2 年生 20 名 3 年生 15 名 計 59 名 (全盲学生は 1 割ほど)	1 年生 11 名 2 年生 12 名 3 年生 10 名 計 33 名 (全盲学生なし)
教員	PT 8 名(助手 1 名を含む。 全盲 1 名) 物理学 1 名、解剖学 1 名、 非常勤(自治大学から 20 名)	PT 7 名(助手 1 名を 含む。全盲 0 名) 整形 1 名、内科 1 名 他学科 + 非常勤多数 名)

また臨床実習の方法に大きな違いがある。臨床実習に関
する両校の差異を下表に示す。

	EUF	筑波技術短期大学部 理学療法学専攻
1 年生	患者を学校に呼び教員が治 療、学生が見学	病院で 1 週間の見学 病院の理学療法士が指導
2 年生	患者を学校に呼び教員が学 生に教え学生が治療 学校の教員が指導	病院で 3 週間の評価 病院の理学療法士が指導
3 年生	LA PA 大学病院 3 回/週、午前中、通年 脊髄損傷の病院で 2 週間(トレド) 病院の理学療法士が指導	2 つの病院で 8 週、8 週の評価・治療 病院の理学療法士が指導



2 年生の臨床実習では患者を学校で治療している
指導は学校の教員が行っている



脊柱の触診授業風景 (3 年生)

学位名：理学療法士、学士号

学修単位：必修 181.5、選択 4.5、自由選択 21、合計 207

カリキュラム上での若干の違いがある。EUF と本学理学療法学科との違いは、物理学が必修。体育がない。

理学療法概論、リハ概論等がない。予防医学、健康医学がある。日常生活動作、地域理学療法、生活環境論がない。また晴眼者も入学可能な骨関節理学療法の卒後2年のコースがある。

2) その他 EUF の3年生が現在実習している LA PAZ 大学病院と EUF3 年生の実習場面を視察した。また ONCE が運営している、見て触れる美術館 TIFLOGICO を視察した。

5. 今後の対応

スペインの視覚障害者団体の底力に驚かされた。理学療法大学は共通点が多く参考になる。若い人は英語を話せることが多く交流は可能と考えられる。



LA PAZ 大学病院の実習場面

平成 18 年 7 月 10 日

保健科学部 保健学科 理学療法専攻 高橋 洋

● 第3回聴覚障害学生高等教育支援アメリカ視察と PEPNet-Japan の近況

本学障害者高等教育研究支援センターでは、聴覚障害学生支援を積極的に進める 12 大学・機関と共に、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（以下 PEPNet-Japan）を立ち上げ、聴覚障害学生支援に関わるノウハウの蓄積・発信に努めています。本稿では、PEPNet-Japan の最近の取り組みについて報告します。

1. 第3回聴覚障害学生高等教育支援アメリカ視察

3月29日～4月9日の12日間、第3回目となるアメリカ視察を行いました。本視察は、2004年より毎年春に実施しているもので、PEPNet-Japan 連携大学・機関の先生方と共に、諸外国の聴覚障害学生支援について学ぶことを目的としています。今回の視察では、前半に、ニューヨーク州のロチェスター工科大学内にある国立聾工科大学（以下 NTID）で行われている学生支援サービスの視察を行い、後半は、ケンタッキー州ルイヴィルで開催された PEPNet 全米大会 2006 へ参加しました。

1) NTID における学生支援サービス

NTID では、視察の柱として、学内の教職員や健聴学生に対する啓発活動や教材開発、アクセスサービス（情報保障）のシステムや具体的な内容、ネットワークを活用した一般大学の支援体制構築、の3点に焦点を絞り、授業見学や聴覚障害学生との懇談を交えながら、実際のサービスの様子を見てきました。「支援サービスとは学生一人ひとりの選択肢を増やしていくこと」という言葉に表されているように、NTID では入学から卒業まで様々なコースとサービスを用意し、学生が自分に合った方法で学んでいける体制が整えられています。この聴覚障害学生支



NTID における視察の様子



NTID の学生とともに

援のモデルを、日本の支援サービスの中にどう取り入れていけばいいか、多くの新しい情報を得ると共に、課題意識も新たに視察となりました。

2) PEPNet 全米大会 2006 への参加

PEPNet とは、聴覚障害学生支援のノウハウを全米に広めることを目的として設立されたネットワークで、全米を

4 地区に分け、各地域のサポート先進校をセンターとして、それぞれネットワークを構成しています。この PEPNet の全米大会は、全米の大学に配置されている手話通訳コーディネーターや学生、教職員が一同に会し、聴覚障害学生支援に関して議論をする場で、2年に1回開催されています。今回は、PEPNet-Japanの取り組みをポスターセッションで発表したほか、STS (speech to text : 文字による情報保障) やアウトリーチに関するセッションなどに参加し、全米の高等教育支援の実践から、日本での取り組みの参考になる情報を多く持ち帰ることができました。



PEPNet 全米大会 2006 全体会の様子



全米大会における PEPNet-Japan の活動発表

2. 第3回聴覚障害学生アメリカ視察報告会

5月14日(日)海洋船舶ビルにて、上述のアメリカ視察の報告会を開催しました。当日は、関係者を含め約60人の参加のもと、NTIDでの視察成果を中心に視察参加者より報告を行いました。報告内容の詳細はホームページにまとめてありますので、是非ご覧ください。

3. TipSheet の作成と公開

PEPNet-Japanの事業として編集を行ってきた、情報マテリアル「TipSheet」の一部がこのほど完成し、ホームページでの公開を始めました。TipSheetは、聴覚障害者とのコミュニケーション方法や情報保障の手段、聴覚障害学生支援の現状と課題など、実際に聴覚障害学生の支援に当たる際に必要となる知識や情報を、トピックごとに1枚のシートにまとめたものです。

聴覚障害学生支援に携わる関係者が、必要な情報を円滑に手に入れて支援を進めていけるよう、今後もトピックの種類を増やして、情報提供マテリアルの充実を目指していく予定です。ホームページより無料でダウンロード可能で

すので、各大学で支援を担当している教職員や聴覚障害学生に、広く活用して頂ければ幸いです。



日本語版 Tip Sheet

4. 今後の活動

今後は、9月にノートテイク指導者養成講座、11月にシンポジウムの開催を予定しています。前者は、学内でノートテイク養成講座の開講を検討している教職員の方々を対象に、養成講座の開催方法やカリキュラム等について解説するもので、国内では初の試みとなります。後者は、アメリカの聴覚障害学生支援コーディネーターを招き、聴覚障害学生支援の今後の方向性について討議する予定です。お誘い合わせの上ご来場いただければ幸いです。

ノートテイク指導者養成講座

日時：9月24日(土) 10時～17時

場所：日本財団ビル(東京都港区)

ネットワークを用いた多地点間通信により、同様の講座を同志社大学、金沢大学、愛媛大学でも受講いただけます。

第2回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

日時：11月18日(土) 10時～17時

場所：日本福祉大学名古屋キャンパス(愛知県名古屋市)

分科会、基礎講座、対談、パネルディスカッション等。詳細はホームページをご覧ください(<http://www.pepnet-j.com>)



障害者高等教育研究支援センター 白澤 麻弓

筑波技術大学ニュース 第3号 発行 筑波技術大学広報委員会 編集 筑波技術大学総務課
 発行日 平成18(2006)年9月 〒305-8520 茨城県つくば市天久保4-3-15
 TEL: 029-858-9424 FAX: 029-858-9312
 E-mail: kouhou@ad.tsukuba-tech.ac.jp URL <http://www.tsukuba-tech.ac.jp/>